

うつくしい！をさがしにこう 平成28年度版『美術』のご紹介



新著者
対談

永関和雄
元全国造形教育連盟委員長

近藤誠一
元文化庁長官

文化に出会い、心を育む美術

光村図書中学校『美術』教科書に新しく関わっていただいた先生方に、
文化に出会い、心を育む美術科の重要性を語っていただきました。

撮影 鈴木俊介



こんどう・せいいち

神奈川県生まれ。近藤文化・外交研究所代表。東京大学教養学部を卒業後、外務省に入省。文化交流部長を経て、ユネスコ日本政府代表部特命全権大使、駐デンマーク特命全権大使、文化庁長官を歴任。石見銀山（島根県）、平泉（岩手県）、富士山（静岡県、山梨県）の世界文化遺産登録に携わる。『文化外交の最前線にて』（2008年、かまくら春秋社）、『外交官のア・ラ・カルト』（2011年、かまくら春秋社）など、著書多数。平成28年度版光村図書中学校『美術』教科書著作者。

世界でも特徴的 自然と寄り添う日本の文化

永関 文化というと、富士山に続いて群馬県の富岡製糸場、和食や和紙が世界文化遺産に登録される運びとなり、日本人としては誇らしい思いです。

近藤 そうですね。日本の文化が世界的に認められている一つの表れだと思います。世界の中でも、日本の文化は非常に特徴的です。歴史上、他の地域にみられるような異民族による征服がなかったため、自らの自然環境や風土の中で、自分たちがこれだと思ふことを絶やさず、継続して発展させていきました。そこにアジアやヨーロッパなどの国々から新

しい文化が入ってきて、それをうまく消化しながら洗練させてきたという歴史があると思います。

永関 自然環境や風土となると、日本の場合は比較的穏やかですね。暑さや寒さ、災害はもちろんありますが、それでも自然から自分の生活を隔離して守るというよりも、むしろ自然の中に溶け込んでいきたいというような部分が、昔からの生活の中にはあると思います。

近藤 まさにそこが日本の文化の特徴の一つだと思います。ヨーロッパの人たちは自然を人間が抑制し活用するものとして捉え、科学技術を進歩させました。しかし日本人は、昔から人間を自然の一部として捉えており、自然とともに、自然に寄り添うように生きてきたといえます。

永関 自然と一体になる、自然を楽しむ、ということは生活に根づいていますね。私たちが日常で使う物には、たいてい草花や動物などといった自然のものがモチーフとして描かれていたり形づくられていたりします。子どもたちにもわかりやすいので、私は、美術の授業などでそういう話をするようにしていました。

近藤 伝統工芸や伝統芸能は、自然のもつ力や奥深さに対する日本らしい見方をしっかり残しています。自然から学ぶべきことを私たちによく示してくれている。だからこそ、そうしたものは大切にしていかなければならないと思います。

永関 私は常に文化を意識している

というわけでもないのですが、それでも何かの機会にそうしたものに触れたときには、どこか懐かしい、自分の日本人としてのルーツを感じますね。それは近藤先生のおっしゃられるように、日本の文化がずっと古くから今まで連綿と続いていて、何か自分に通ずるところを感じているからなのかもしれません。

年中行事から感じる 身近な文化

近藤 私の場合、自然や文化への意識は、幼い頃から刷り込まれていったものです。中学校のときは鎌倉に住んでいて、学校に行く途中、坂を登ると富士山がよく見えて美しいなと感じていましたし、多くの年中行事もありました。豆まきやひな祭り、端午の節句などですね。



ながせき・かずお

東京都生まれ。元全国造形教育連盟委員長。多摩美術大学美術学部を卒業後、教職に就く。中学校美術科教諭を経て、美術担当指導主事や校長という立場から美術教育の発展に尽力し、2014年度まで全国造形教育連盟の委員長を務めた。教鞭を執るかたわらは、自身も創作活動に勤しみ、墨や水彩絵の具による絵画、版画などの作品を制作する。平成28年度版光村図書中学校『美術』教科書著作者。

永関 そうした行事からは、季節や自然の移ろいを感じられますね。また、立派な文化だとも思います。文化という言葉から高尚な印象を受けますが、生活に根ざし、暮らしの中で育んできた面も大いにあるのだと思います。

近藤 そうですね。家庭や学校、あるいは地域の中で、子どもにそうした日常的な文化や自然に触れさせることは大切です。教え込むというよりも体験させることで、より多くのものを子どもたちに伝えられます。



永関先生の活動

町 田市立町田第三中学校の校長を務めていた頃には、学校運営の中で美術や文化に関する取り組みを積極的に行った。写真は2014年の餅つきの様子。生徒たちが田植えや稲刈りをした餅米を使って、釜をつかって蒸す。地域の方々の手を借りて、お雑煮やあんこ餅、きなこ餅などがつくられた。生徒は地域の方々と一体となって楽しんだ。

「文化には、生活に根ざし、暮らしの中で育んできた面も大いにある。」

永関

と減ってしまったように感じています。私は二つの中学校で校長をしましたが、どちらの学校でも、季節の行事を体験するというのを学校の特色として取り組みました。餅つきをしたり、こいのぼりを立てたりしましたね。餅つきは有志の生徒が中心となって、地域の方に手伝っていただきながら、釜を使って餅米を蒸すところから行いました。

近藤 そしてつきたてを皆で食べるわけだ。いいですね。地域の方との交流という面でも、素敵な取り組みだと思います。

永関 七夕飾りも、地域の方から4メートルもあるような竹をいただいてつくっていました。珍しい例だと思いますが、こういうことを学校で意図的にやらないと、今の子どもたちは経験しないまま成長していつ

てしまいます。こうした取り組みはやるとなると大変ですが、保護者や地域の方からの評判がよいです。

近藤 そういう地域の方々を巻き込んでいくことは重要だと思います。どうしても受験でいい学校に入って就職して働いて……ということばかりを考える時代になってしまっているの、生徒たちの感性を培うような取り組みに理解者が増えていくといいですね。そのためには美術や文化というものに対して、普段関心を寄せていないような人々にも関わってもらうことが大切になっていきます。

生徒の感性に大人が学ぶ文化に親しむ美術の授業

永関 今のは学校全体の取り組みでしたが、美術の授業では、例えば和



平成28年度版光村図書中学校『美術I』教科書の紙面。和菓子をつくる授業の参考になるようにと、本物の伝統的な和菓子の写真を大きく掲載している。

菓子づくりの実践がありますね。和菓子は生徒にとって身近なところで、日本らしさや文化といったものを感じられます。自分で和菓子のデザインを考えて粘土でつくるという授業はよく見かけるのですが、ある中学校では地域の和菓子屋さんに協力してもらって、白あんと色鮮やかな食紅をわけていただき、それをを用いて授業をしていました。

近藤 実際に食べられる材料ということですか。

永関 はい。生徒たちもとても意欲的に取り組んでいました。本物の和菓子をつくっているわけですから気合いの入りようも変わってきます。

近藤 私も和菓子というのはよく日本の文化を表しているものだと思います。季節を感じさせるモチーフを、見た目に美しい形や色であらわして

いる。これをつくるには、どの季節に何が美しく見えるのかということを知っていなければなりません。その時々自然へのまなざしが必要になりますね。

永関 その通りです。生徒たちがデザインをしっかり考えるためには、すぐに制作に入るのではなく、モチーフに関する調査も必要になります。その本物の和菓子の授業でおもしろかったのが、和菓子を完成させたあゝる生徒が、「先生、これ、このまゝ色紙の上ののせるだけではもったいないから」と言って、自分で葉っぱを取りに行つて、和菓子の下に敷いたのです。

近藤 素敵なエピソードですね。また、生徒がそうした提案をできる環境も含めて、先生はいい授業をされていますね。

新著者対談
永関和雄 × 近藤誠一
文化に出会い、心を育む美術

永関 そういう工夫を自らしていく生徒もいるのです。本当に素晴らしい感性をもっていると気づかされることが多々あります。どれだけ美術や文化について学んだ大人でも、思いつかないような発想です。そしてそれを認めてあげることが私たちの役目ですね。



近藤先生の活動

2011 年1月7日～6月24日に日本経済新聞社で連載した「あすへの話題」をまとめた一冊。連載中に起きた東日本大震災を受け、被災地への持続的支援の必要性和文化芸術の力を活用した復興教育への支援を訴えており、その思いに共感した21名の作家が挿絵を提供している。



『ミネルヴァのふくろうと明日の日本』
近藤誠一著 2013年
かまくら春秋社

2013 年、文化庁長官として参加したユネスコ世界遺産委員会。厳しいとされていた三保松原を含めて、富士山の世界文化遺産登録を勝ち取った、その舞台裏をつづった一冊。世界遺産の意義や日本の文化の特徴、外交官の交渉術まで読み取れる最新刊。



『FUJISAN 世界遺産への道』
近藤誠一著 2014年
毎日新聞社



新著者対談
永関和雄 × 近藤誠一
文化に出会い、心を育む美術

「美術科は、知識としてあれこれ覚えるのではなく、文化を体験的に感じられる教科。」

近藤

教師に求められる役割は生徒の潜在的な能力を紡ぎ出すこと

近藤 他の教科でも可能ですが、特に美術科では感性が生かされる機会が多いでしょう。生徒たちが心の中にもっている潜在的な感性をいかに紡ぎ出してあげるかが先生方の役割だと思います。生徒たちの発想や考えを押さえつけて、何かを教え込むのではなく。

永関 おっしゃる通りで、例えば鑑賞の授業で美しいものを見たとして、まず大事なことは「わあ、きれいな」と感じるることなんです。私がよく生徒たちに言ってきたのは、そうした感動を言葉にすることです。どうしてこんなにきれいなんだろう、ここの色かな、形かな、とい

うようなことを考えて、言葉で表現させる。そして出てくる生徒たちの言葉を聞くと、その感性に驚かされることが多々あります。

近藤 やり方によっては作品の作家や時代背景を知識として教えることもあるでしょうが、あくまでも知識は手段であって、目的ではありません。より深く作品を見つめて感動を経験するには、知識が必要ないときもある。そこで先生方に求められるのは、いかに生徒自身の言葉を引き出してあげるかだと思います。



「感じたことを話し合おう」では、2ページにわたって一点の作品を大きく掲載し、対話による鑑賞の活動を促している。

永関 最近、学校で授業を見ていると、まず生徒に作品と出会わせる授業が増えていて、喜ばしいことだと思います。例えば光村の教科書の「特別展示室」では、きれいな印刷で作品がほんと大きく掲載されている。生徒たちも作品の細部までよく見つけることができ、鑑賞の授業に活用できますね。

近藤 授業では生徒それぞれの感動があるだろうから、それらを共有することで新たなものの見方に触れることもできますね。先生方は生徒た

ちの気づきを促すよう、ぼつりとしたつぶやきを聞き逃さず拾ってあげることが大切です。

美術科の先生方が果たす大事な役割

永関 『美術1』の「文様、飾りの小宇宙」(P30-33)という題材を見ていると、美術科の意義を感じます。世界各国の文様が並んでいる美しい紙面です。世界にはいろいろな人々がいてそれぞれに文化があって……ということを、説明だけでなく目で見て感じるができます。

近藤 そうですね。ここでは西洋や東洋ということ無しに、公平な目で文化を見つめることができます。どの文様も平等で、それぞれに特徴もあれば似ているところもある。人間が共通して持っている美意識を感じてくれることを願うし、文化について考える基本になると思います。

永関 自分の住む日本という国の文化に触れることも大切ですが、同じくらい、他の文化について理解することも必要ですね。美術の場合、それがすんなりと生徒たちに入っていく気がします。

近藤 知識としてあれこれ解説を覚



『美術1』の4ページ題材「文様、飾りの小宇宙」の最初の2ページ。日本の伝統文様や世界各国の文様が色鮮やかに並んでいる。

えるのではなく、文化を体験的に感じられる教科だからでしょうね。文化を理解し合い認め合うことは、これからの世界にあってより求められることです。

永関 美術科というのは、作品をつくる技術を学ぶ教科ではなく、文化や自然などに触れ、自分がどう感じ

るかということが原点にあって、それを自分で表現してみようという教科です。先生方には完成する作品ではなく、それをつくる過程にこそ意識を向けて授業を行ってもらいたいです。生徒たちの感受性に目を凝らしてほしいと思います。

近藤 いろいろな教科の中で、今の生徒たちに最も必要な感性や精神性、人や自然を敬う心につながる教科が美術科だと思います。そういう意味で、美術科の先生方は学校教育の中で最も大事な役割を果たしています。生徒の潜在的な感性や能力を引き出すような授業が、今後も増えていくことを願います。



平成28年度版 光村図書中学校『美術』教科書

近藤先生と永関先生に著作者として加わっていただいた新版教科書は、1年と2・3年の2冊構成になりました。1年で基礎基本をおさえ、2年3年で表現の幅を広げていける内容になっています。次のページからは、工夫を凝らした教科書紙面をご紹介します。



『美術1』表紙作品
三沢厚彦「Animal 2007-03」



『美術2・3』表紙作品
ルネ・マグリット「ピレネーの城」